様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１４１８５

研究課題名（和文）幼児の注意喚起行動とその応答の関係性の解明-子育て及び教育支援への応用-

研究課題名（英文）Research of the Relationship between Attention - Seeking Behavior and Its Response in young Children and Its Application to Parenting and Educational Support

研究代表者
廣瀬　翔平（Hirose, Shohei）

立命館大学・総合心理学部・助手

研究者番号：２０８０２０４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：注意喚起行動は，言語によるものでは「みて」「質問」「説明」「呼びかけ」「完了報告」，行動によるものでは「提示」「指差し」が観察された。また，3歳児クラスでは「説明」「完了報告」「質問」，4歳児クラスでは「呼びかけ」が多かった。注意喚起行動は，遊びの中では，何かを共有し，そのことがきっかけとなり，子ども同士のやりとりを展開，拡張する機能が示された。また，お互いの活動を助けあう際に，注意喚起行動を使用することによって，活動を円滑におこなうことができる場面もみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
注意喚起行動は，遊びの中において，5歳児クラスの子どもでは「提案」や「共同作業」のきっかけとなりうることが明らかになり，3歳児クラスの子どもでも，注意喚起行動は多くみられたことから，注意喚起行動を遊びの中でうまく利用できるように，周りが介入することによって，子どもたち自ら遊びの中でのコミュニケーションを広げることにつながると考えられる。また，注意喚起行動は，異年齢交流という年少の子どもに接するコツを見せたり，伝え合ったりする場面においても機能しており，年長の子どもが年少の子どもたちへの思いやりや責任感などの学びを得るための経験を支える行動であると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Verbal Attention-Seeking Behaviors observed were "look," "question," " explanation," "call," and "completion report. On the other hand, "presentation" and "pointing" were observed as behavioral Attention-Seeking Behaviors. In addition, "Explanation," "Completion report," and "Questioning" were observed more frequently in the 3-year-old children's class, and "Calling" in the 4-year-old children's class. Attention-Seeking Behaviors showed the function of sharing something in play, which triggered the children to develop and extend their interactions with each other. In addition, there were situations in which the use of alerting behaviors in helping each other facilitate activities.

研究分野：子ども学

キーワード：注意喚起行動　子ども　行動観察　子育て支援　教育支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

子どもを観察すると，「みて」や「みてて」といい，他者の注意を引きつける発話が頻繁に見られる。この他にも，他者の視線の前に注意を引きつけたい対象を提示する行動などもよく観察できる。こういった他者の注意を得ようとする発話や行動を注意喚起行動という。この注意喚起行動は，子どもの発達において重要な役割を果たす可能性がある。例えば，2 歳児と親の間での注意喚起行動についての研究では，親の応答性の質が注意喚起行動の質に関連していることや，親の応答性の質が，子どもの共同作業でのやる気に関連することが示されている（Gosselin，2012）。加えて，集団生活では，子どもが保育者と一対一の関係を築くために使用されること（福崎，2002; 名和・鈴木，2014）や，他者からの承認を得るために機能することが示されている（石黒，1999; 福崎，2001）。さらに友人関係での共感的な機能についても考察されている（福崎，2006）。以上のことから，注意喚起行動は子どもにとって重要なコミュニケーション方法であり，対人関係の形成や集団生活への適応に影響しているといえる。しかしながら，注意喚起行動がもつ機能を活かした子育てや教育実践の応用には至っていない。この背景には，保育場面では，注意喚起行動があまりにも日常的であり，わざわざ焦点化されない（福崎，2006）こと，それに伴って，子どもが行う注意喚起行動自体についての知見が不十分であることが考えられる。そこで本研究では，子どもの注意喚起行動に焦点を当て，行動自体の意味や機能を整理し，その知見に基づく実践とその効果を検証の必要性がある。

子どもの注意喚起行動は，子どもと関わる人であれば，日常的に経験することができる。そのため，子どもの「みて」は，子育てを取り扱う様々なブログやホームページで取り上げられている。それらは，幼児の「みて」攻撃への対処法などとして，あたかかく見守ることや応答して褒めることの重要性を述べられている。このことから，「みて」や「みてて」は，多くの養育者や保育者にとっての関心事であり，その対応に頭を抱える課題であることが伺える。一方で，それらを煩わしいものととらえるのでなく，応答してあげるべきものであるとしている。そのため，子育てや保育に関わる人々にとって，子どもの「みて」攻撃に対応することの負担や，うまく対応できなかった場合には，よくないことをしたという罪悪感のような負担がのしかかっている可能性がある。しかし，これらの情報は，インターネット上のブログのような子育て記事などがほとんどであり，学術的「問い」でも述べたように，学術的な研究成果は充実していないことから，どの程度妥当性や信頼性のある情報であるかは不明である。そのため本研究は，これらの子育てや保育に関わる人々に，注意喚起行動が持つポジティブな側面の情報を提広く発信し，さらに実践的な子育て支援や教育支援のアイディアを提供する。これらによって，子どものコミュニケーション能力の発達，子育て・保育の質の向上を目指す。

２．研究の目的

本研究では，注意喚起行動の解明と実践の 2 つを目的とする。1 つ目の段階として，注意喚起行動の解明を行う。注意喚起行動とそこからつながるやりとりについて，比較行動学や発達心理学の手法を用い整理する。同時に，注意喚起行動が生起した個々の事例に焦点を当て，保育学的な観察を行う。2 つの観察結果の融合により，注意喚起行動への応答やその後の行動を整理し，注意喚起行動が起点となるやりとりの連鎖として扱い，一連の行動の流れとして捉え直し，注意喚起行動がもつ意味の解明を目指す。

2 つ目の段階として，注意喚起行動とやりとり連鎖が生起しやすい環境を考えること，注意喚起行動への応答の違いがその後のコミュニケーションに与える影響を考える。この結果から，子どもの注意喚起行動がもつコミュニケーションにおける意義を活かした子育てや保育を考えることができる。以上のことから本研究は，学術的価値としては，注意喚起行動という子どもの特徴的な行動の 1 つを解明できる。さらに，社会的価値としては，養育者や保育者・教育者といった幼児と関わる人々へ子育て・保育の実践に活用できるアイディアの提供を目指す。

３．研究の方法

本研究は，子ども園での子どもの日常の集団生活場面の観察によって実施された。集団生活場面において，幼児-保育者間，幼児-幼児間での遊び場面を観察した。観察は，手書きメモによる記録とビデオカメラを用いた映像記録を使用した。注意喚起行動が生起した状況，どのような方法で注意喚起行動をしたか，集団場面の観察では誰に対してか，注意喚起行動の応答，その後のやりとりについて記録した。研究初年度の観察では，遊びの場面を区別せず可能な限り，さまざまな遊びの場面を観察した。次に，注意喚起行動が観察されやすい遊び場面に焦点をあてた観察を行った。製作の場面や砂遊び，泥団子作り場面，室内での数に制限のあるおもちゃでの遊び場面などを取り扱った。

４．研究成果

2019 年度の研究では，3 歳児クラスから 5 歳児クラスを対象に，認定こども園の集団生活場面を観察し，子どもの注意喚起行動とそれらへの応答の事例を収集した。屋外の観察では，砂遊び

場面を中心に分析・考察を行なった。砂遊び場面では，泥団子，おままごとでつくったもの，サラ砂，といった自分がつくったものを「みて」などの発話，もしくは，相手の目の前まで持ってみせる「提示」の事例が多く観察された。一方，屋内の観察では，製作場面を中心に分析・考察した。発話によるものでは，「みて」「質問」「説明」「呼びかけ」「完了報告」，行動によるものでは，「提示」「指差し」が観察された。これらのカテゴリについて，3 歳児クラスと 4 歳児クラスの生起頻度を比較した。その結果，3 歳児クラスでは「説明」「完了報告」「質問」，4 歳児クラスでは「呼びかけ」が多く観察できた。

2019 年度の観察結果を受け，2020 年度は，砂遊び場面，特に泥団子作りの場面での子どもの注意喚起行動とそれによって生じるやりとりの観察を行った。泥団子作り場面では，注意喚起行動によって泥団子を共有し，それがきっかけとなるやりとりの展開，泥団子作りが促進するような行動が観察できた。また，複数の子どもが同じものを，テーブルを囲んでつくる製作場面の観察も実施した。新年度初期の観察事例では，新入園児のような園での生活に馴染めていない子どもの場合，注意喚起行動が園での生活適応に必要な機能を有することを示す事例も観察できた。このほかにも，3 歳児クラス以前から入園しており，園生活に慣れている子ども同士では，注意喚起行動によってお互いの製作を助けあうことで円滑に製作がおこなえるようになることを示す事例もみられた。

2021 年度は，前年度に，子ども同士の注意喚起行動でお互いに助けあいにつながる場面などが観察できたことから，注意喚起行動による「共有」を子ども同士の成長につながる場面に注目し，調査を実施した。1 つ目の場面は，自由あそびにおけるモノのやりとり場面であった。この場面において，特に 5 歳児クラスの子どもは，注意喚起行動によって「提案」や「共同作業」のきっかけとなりうることが明らかになった。3 歳児クラスでも，注意喚起行動は多くみられたことから，注意喚起行動を遊びの中でうまく利用できるように，周りが介入することによって，子どもたち自ら遊びの中でのコミュニケーションを広げることにつながると考えられる。2 つ目の場面は，異年齢交流場面での年上の子どもが年下の子どものお世話をする場面であった。ここでは，5 歳児クラスの子どもが，外遊びに出て行こうとする 1 歳児クラスの子どもに靴を履かせてあげる異年齢交流の場面を観察した。5 歳児クラスの子どもたちが 1 歳児クラスの子どもたちに靴を履かせる際に，5 歳児クラスの子どもたちの同年齢のやりとりとしては，靴を履かせる方法(コツ)を見せたり，伝え合ったりする場面が観察された。また，コツを伝えられた子どもは，その内容を理解して実践しようという姿もみられた。このように同年齢の子どもと一緒に靴履かせをすることには，他の子どもの行動を観察，もしくは自身の行動を客観視して，靴履かせの方法を改善しようとするきっかけになる可能性がある。加えて，異年齢の交流という点で，年齢が下の子どもの世話を自発的にすることから，年長児として，自分よりも年少の子どもたちへの思いやりや責任感などの学びを得ることができる重要な経験であるとも考えられる。異年齢交流場面は，子どもたちが成長する機会として，教育的意義は大きいことが示唆され，その中で注意喚起行動の役割も重要であることが示唆される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 依光 美幸・塚田 賢信・天野 京子・長尾 卯乃・幕内 充・ 矢藤 優子・廣瀬 翔平・山田 良治
２．発表標題 Rey複雑図形の描き順に影響する損傷部位と認知機能の探索―脳腫瘍患者の描画検討―
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 廣瀬 翔平
２．発表標題 製作場面における幼児の注意喚起行動の役割の検討
３．学会等名 日本乳幼児教育学会第30回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 廣瀬 翔平
２．発表標題 泥団子作り場面における幼児間のコミュニケーションの検討
３．学会等名 日本発達心理学会第32回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 廣瀬翔平・園田和子・園田裕紹・矢藤優子
２．発表標題 製作遊び場面における幼児の注意喚起行動の行動目録
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬翔平・園田和子・園田裕紹
２．発表標題 幼児は遊びの中でどのような会話をするのか－砂遊び場面の観察による検討－
３．学会等名 第16回日本子ども学会議学術集会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬翔平
２．発表標題 集団生活場面において幼児が関心をもつ周囲の事象－幼児が「みせて」という場面の観察－
３．学会等名 日本子育て学会第11回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬翔平
２．発表標題 製作遊びを通しての幼児のコミュニケーション－3歳児クラスと4歳児クラスの比較－
３．学会等名 乳幼児教育学会第29回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬翔平・園田和子・園田裕紹
２．発表標題 遊びの中での子どもの会話－砂遊び場面の観察による検討－
３．学会等名 2019年度立命館大学人間科学研究所年次総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣瀬翔平・中妻拓也
２．発表標題 大学生における共有行動が会話の展開に及ぼす影響
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関